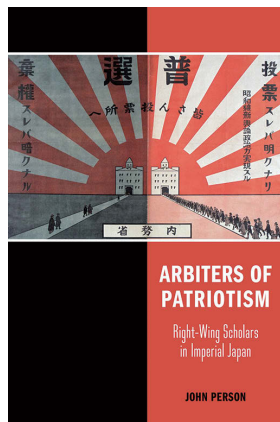


ジョン・パーソン

『愛国心の裁定者——帝国日本の右翼学者たち』

John Person, *Arbiters of Patriotism: Right-Wing Scholars in Imperial Japan*

植村和秀



University of Hawai'i Press, 2020

本書は、原理日本社の三井甲之（一八八三～一九五三）と養田胸喜（一八九四～一九四六）の思想と行動を、彼らが活動した当時の日本の歴史的文脈のなかに位置付けようとする試みである。日本語と英語の一次資料や研究文献を駆使し、とりわけ、きわめて読解の難しい三井と養田の著作を丁寧に読み解いての研究は驚異的である。批判された人びとが狂信的と黙殺した彼らの思想と行動が、本書ではより広い文脈のなかに位置付けられ、それによって、近代日本の知的文脈へのより均衡の取れた理解が目指されるのである。

第一章で取り上げられるのは、三井甲之の主に文学的な活動である。正岡子規に連なる歌人として、三井は明治末期から、生の文学的探究に鋭意取り組んでいた。最先端の文学的・哲学的諸潮

流を日本のみならず世界にも求め、感情や宗教的体験を重視して、自己の内面生活の全体を表現しようと試みたのである。これは決して三井の孤立した試みではなく、仏教思想の再評価やドイツ思想の受容も含めて、大正生命主義とも呼ばれる当時の日本の大きな知的潮流のなかにあったものであることを著者は強調している（p. 26）。

この試みは発展して、日本への信仰に帰着した。人間の内面生活の文学的な探求が、人間存在の前提とされるネイションへの崇拜となったのである。もともと、三井の発展の理路は必ずしも分明ではない。著者は、三井のナショナリズムが根本的に個人的で情動的であり、しかも社会的で教義的であると、これらを言語や表現の力への信仰、帝国ネイションの運命への信仰というロマ

ン主義的な観念がつなげていると指摘する(㉟)。これは原理日本社史の見地からすれば、日本語の力や日本帝国の歴史的使命に対する信仰が、個人と社会、感情と教義を統一し、日本ネイションの一体性を各構成員に示現させるという結社の論理の成立経緯として理解できるであろう。もとよりこの論理は、現実にもそうなっていないと批判されて当然である。しかし結社の同人は、信仰の欠陥を認めず、誰かがどこかで妨害していると主張する。三井や蓑田たち原理日本社同人は、「真の愛国心の裁定者」を自認して(㊱)、信仰を共有しない他者を弾劾し続けるのである。

ただし著者は、このような原理日本社に特徴的な姿勢よりも、三井や蓑田が他の知識人と共有する部分や、日本主義(Japanism)イデオロギーと国家権力との微妙な関係の方に重点を置いている。三井や蓑田を同時代の知識人から孤立した存在としてではなく、世界の最先端の知的諸潮流に関心を持ち、日本の知的状況に連動する知識人として把握する一方、昭和戦前期の治安当局の調査報告書を追跡して「右翼思想犯罪」という言葉の使用に注目し、当局と日本主義者とが競合し対立する局面に注目するのである(㊲)。

第二章は、敗戦後の三井が民主主義に理解を示した挿話から始まる。著者によれば、三井は第一次世界大戦の顛末を踏まえて、大衆の政治参加が戦争の勝利に不可欠であると判断するなど、大

正期にも決して時代の潮流の外に立っていただけではなかった(㊳)。それでは三井の思想の独自性とは何なのか。それは、経済的正義や政治的権利よりも道徳的正を重視し、その実現を学問の力に求めることにある(㊴)。維新とは「学術維新」なのであり、その主たる戦場は大学と論壇なのである。大学と論壇の維新は、三井にとつて知識人の責務であり、これは蓑田胸喜も同様である。学問の力を信じて政治的変革を主導しようとするこの意欲は、第五章で蓑田と三木清に共通する部分として把握されることとなる。

第三章からは蓑田が論述の主軸となる。三〇代の蓑田が戦闘的に突出したのは、マルクス主義批判の言論活動であった。蓑田は三井とともに、ヴィルヘルム・ヴントの心理学をきわめて高く評価し、マルクス主義の人間理解や科学性には重大な欠陥があると批判する(㊵)。蓑田はさらに、ヴントに学んだヘンドリック・ド・マンのマルクス主義批判を翻訳して、ナシヨナリズムが大衆政治の新しい情動的な基礎になるとの主張も紹介する(㊶)。このような蓑田の活動が、マルクス主義の学生運動に悩む文部省との間に便宜的な協力関係を生み出していくのである。

ここで著者が便宜性を強調するのは、日本ナシヨナリズムの諸形態と国家権力との関係を、従来の研究よりも丁寧な説明しようとするからである(㊷)。著者は序論で、右翼と左翼の二項対立

を分析の前提とすることに慎重な姿勢を示し、右翼という日本語の歴史的な脈を踏まえて検討を行なう方針を明らかにしていた(291)。そのうえで著者は、この言葉が大正末から昭和戦前期に政治的対立軸として広く使われるようになり、原理日本社の一九二五年の設立は、まさにその時期に該当すると指摘する。その後、左翼運動の衰退とともに右翼急進主義への警戒を強めた治安当局が、取り締まりの対象として右翼という言葉を用いるようになり(292)、反革命の旗幟を鮮明にする原理日本社も当局と微妙な関係に立つことになった、とするのである。

第四章の表題は、それゆえ「右翼の監視」となっている。本章の主題は、天皇機関説事件から國體明徴運動へと進む政治情勢と言論空間の変化である。それは進歩的・自由主義的勢力の衰退であると同時に、「右翼思想犯罪」という言葉が当局によって構成される時期でもある。これに対して、「愛国心の裁定者」を自認する「新世代の思想犯罪者たち」は、政府を幕府と呼び官吏を幕吏と呼んでその國體への忠誠に疑問符を突きつける(290)。上田閑照が戦時期の西田幾多郎の努力を日本主義者に抗する「意味の争奪戦」と呼んだことに倣えば、国家権力と日本主義者との間で裁定者の地位争奪戦が行なわれた、と言えるのかもしれない。

第五章で論じられるのは、西田を執拗に批判した蓑田と、西田の愛弟子である三木清が、それぞれ思想の力を信じて戦時期に行

なった努力の軌跡である。政治を指導しようとする知識人の努力は、軍人や官僚にも支持者を得て、一九三〇年代にはなお持続していた。人間の全体も国家の全体も把握しうる総合的な原理に基づいて、複雑で流動する現実を把握し、日本から東アジアへと広がる未来を指し示すことは、蓑田と三木に共通する意欲であった。しかし、この意欲は成功を収めず、一九四五年に三木は獄死し、一九四六年に蓑田は自決する。昭和研究会のみならず原理日本社の側でも、知識人の指導力は夢に終わったのである。

さて本書は、「右翼」という日本語の歴史的な検証を行なうと同時に、「右翼学者」として三井と蓑田を把握しようとしている。とはいえ、明治期や大正期の三井の活動は右翼という言葉が政治的に一般化する以前のものであり、合法路線を堅持する原理日本社の活動は、右翼思想犯罪を構成しないよう配慮したものである。本書の視座は、「右翼」という言葉を政治状況の中に限界付けることによつて、実はむしろ、日本主義という思想潮流を時代状況の中で再検証する方向に進みうるものではないか。

この視座は、著者が紹介する小松茂夫の見通し(292)を発展させうるものであろう。小松は、「伝統」すなわち「日本」を原理とするその思想構造のなかへ「近代」そのものを積極的に契機化していく」試みとして、陸羯南や三宅雪嶺、志賀重昂の日本主義を分析した。小松によれば、この政論的な日本主義の後に出現

した形態が、高山樗牛の美学的な日本主義であり、そのさらに後の形態が、三井甲之や五百木良三の歌学的日本主義である。それぞれ、「保守的、反動的、反革命的」な政治的機能を果たしつつ、「思想原理」としての「日本」が問われ続けたと小松は総括している。⁽²⁾

本書は、この第三の形態を分析すると同時に、昭和戦前期の戸坂潤による日本主義分析を前進させうるものでもあるように思われる。戸坂は「ニッポン・イデオロギー」を論じて蕨田の名を挙げ、無内容な日本主義にはあらゆるものが「勝手に」押し込められると揶揄する。⁽³⁾ さらに「文化統制の本質」を論じて、日本の「統制」が「積極的な対立的な構成」へ進んでいくと推測する。⁽⁴⁾ 一九四五年に獄死した戸坂に不可能であつた分析を、著者は客観的な立場で進めているのである。

著者の視座はまた、ドイツのフェルキツシュ・イデオロギーについてのジョージ・モッセの分析と連動させられるように思われる。⁽⁵⁾ 同書の英語表題は、*The Crisis of German Ideology: Intellectual Origins of the Third Reich* である。他方、日本主義の思想と運動において、言論弾劾に熱心な原理日本社は建設的な側面の代表者とは言い難いのではないか。大川周明や北一輝、神兵隊事件関係者などへの分析の広がり、官憲には従順な原理日本社との対比のために必要であるように感じられる。

さらに、知識人全体を視野に収める著者の関心からすれば、戸坂潤の再検討も可能なのではないか。高山岩男は昭和の初め頃、スターリン主義はマルクス主義と離れすぎているのではないかと戸坂に指摘して、「スターリンが言ってるから、それは真理なのだ！」と反論されたと回想している。⁽⁶⁾ 戸坂の立場での「狂信」もまた、現在の学問の取り組むべき課題であろう。

注

- (1) 上田閑照『西田幾多郎とは誰か』岩波現代文庫、二〇〇二年、二三八～二三九頁。
- (2) 小松茂夫『歴史と哲学との対話——同時代批判の視座を求めて』平凡社、一九七四年、七三頁。
- (3) 戸坂潤『日本イデオロギー論』岩波文庫、一九七七年、一四七頁。
- (4) 『同』、一九三頁。
- (5) ジョージ・L・モッセ、植村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳『フェルキツシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房、一九九八年。
- (6) 高山岩男『京都哲学の回想——旧師 旧友の追憶とわが思索の軌跡』一燈園燈影舎、一九九五年、八七頁。